

コモンズからのお知らせ

心からお詫び申し上げます

本情報誌の発行が、当初昨年秋の予定が半年遅れてしまいました。この間、年末には当法人が17年度に茨城県から受託した「ひきこもり支援事業」の決算報告に関して住民監査請求が行われ、監査委員会が県に勧告を行いました。このことがマスコミ各社で大きく報道され、NPOにかかわる多くの方々にご迷惑やご心配をおかけしました。この件に関して、コモンズではホームページで状況や背景に関して説明を行いました。

また、理事会において会計処理や業務記録のルールづくりやそのチェック体制について検討を行いました。さらに、今回指摘を受けたことで、現状の委託事業における費用の積算方法や契約の仕方に関する課題やNPO法人のガバナンスについて多くのことを学びました。

コモンズとして、今回学んだことを今後の活動に活かしていく所存でございますので、引き続きご支援をよろしくお願い致します。



須能馨さん

退職します

茨城NPOセンターコモンズを3月で退職します。大変お世話になりました。ありがとうございました。

今後は、今までNPOの中間支援の立場としてNPOに発信してきたことを、実践する場として水戸市内を舞台に活動を展開することを考えています。

まずは身近なところから、地域のニーズを掘り起こし、先輩や同級生など地域資源の活用、居場所の提供、休耕地の活用、地域企業とのまちづくりなど、できることから少しずつ活動しようと思っています。

地域の人が健康で安心して暮らしていけるまちづくりを目指しますので、引き続き応援をよろしくお願い致します。

発行 特定非営利活動法人 茨城NPOセンター・コモンズ

〒310-0063 水戸市五軒町2-23-102
 TEL: 029-300-321 FAX: 029-300-320
 URL: http://www.pccm.or.jp
 MAIL: info@pccm.or.jp

つくばオフィス

〒305-0022 つくば市吉瀬176-1 つくば文化郷別館206号
 お越しの際は事前にご連絡下さい TEL/FAX: 029-87-7000



団体会員一覧

- 水戸下市かえるタウン交流の会
 - NPO法人 水戸こどもの劇場
 - NPO法人 ジュース
 - ジョイスター株式会社
 - NPO法人 茨城YMCA
 - NPO法人 ひたち親子劇場
 - ウルノ商事株式会社
 - NPO法人 こすもす
 - NPO法人 子ども劇場茨城
 - NPO法人 ユーアンドアイ
 - NPO法人 いばらき介護福祉の会
 - NPO法人 おおぞら
 - NPO法人 日本医療救援機構
 - NPO法人 自然生クラブ
 - NPO法人 共楽館を考える集い
 - NPO法人 リヴォルヴ学校教育研究所
 - NPO法人 ワークスたんぼぼを支える会
 - NPO法人 福祉支援団体ふれあいいいなほ
 - 茨城県青年海外協力隊を育てる会
 - NPO法人 アサザ基金
 - NPO法人 茨城県精神障害地域ケア研究会
 - NPO法人 ふじしる福祉の会
 - 生活協同組合ハイコープ
 - NPO法人 自立生活センター
 - ライフサポート水戸
 - 有限会社 つくばインキュベーションラボ
 - NPO法人 ビスターりさとみ会
 - NPO法人 つくば環境フォーラム
 - 中央労働金庫
 - NPO法人 取手市手をつなぐ育成会
 - NPO法人 ままとーん
 - NPO法人 環境市民クラブ
 - スィミング・サークル・桜川
 - NPO法人 ボランのひろば
 - NPO法人 穴塚の自然と歴史の会
 - NPO法人 来夢ハウス
 - NPO法人 ゆりの会
 - NPO法人 つくばクリエイティブ・リサイクル
 - NPO法人 生活支援ネットワークこもれび
 - NPO法人 ふるさと元気塾
 - NPO法人 まちづくり市民会議
 - NPO法人 にこにこサービス
 - NPO法人 子どもの研究所
 - NPO法人 水戸共に育つ会
 - NPO法人 ニューライフカシマ21
 - 赤塚みなみ保育園
 - 社会福祉法人 ユーアイ村
 - NPO法人 筑波山環境クラブ
 - NPO法人 いきいきネットワーク
 - NPO法人 あすかユーアイネット
 - NPO法人 いきいき・サポート
 - 有限会社 すのう商事
 - NPO法人 ファミリーサポートしあわせ
 - NPO法人 あゆみ
 - NPO法人 並木会
 - NPO法人 日本ダウン症ネットワーク
 - 日本労働組合総連合会 茨城県連合会
 - NPO法人 ドリーム たんぼぼ
 - NPO法人 N&N Corporation
 - NPO法人 HSEリスク・シーキューブ
 - 東海村支部「NPOレーきゅうぶ東海村」
 - NPO法人 エイエスピー
 - NPO法人 福祉サポートセンター県西さわやか
 - NPO法人 ナルク水戸
 - NPO法人 あすなる会
 - NPO法人 ウィラップ北茨城
 - NPO法人 福祉会 ねこの手
 - NPO法人 グリーンビュア
 - NPO法人 結城まちづくり研究会
 - NPO法人 まごころねっとわーく
 - NPO法人 次世代教育センター
 - NPO法人 たすけあいネット民の会
 - NPO法人 ふれあい潮来
 - 株式会社 水戸ロイヤル
 - 浅井心理相談室
 - NPO法人 うしく里山の会
 - NPO法人 グリーンホーム(申請中)
- 以上75団体(順不同)
2007年3月1日現在

COMMONS

第 6 号



「コモンズ」とは市民・企業・行政・市民団体などが自由に参加して情報を交換し、新しい価値観を共有する場を意味しています

いばらきNPOフォーラム2006

中高年世代、活躍の場は企業から地域へ
NPOとのつながり、地域を元気に



社団法人 日本フィランソロピー協会
理事長 高橋陽子さん

「企業・社員とNPOの出会い～キャリアを地域づくりに活かしてみませんか」をテーマに昨年秋開催したNPOフォーラム2006。

基調講演は、日本フィランソロピー協会理事長の高橋陽子さんに「なぜ今社会貢献か」と題して、様々な事例を交えお話をいただいた。

企業、行政、NPO関係者など多数の方々に参加し会場は熱気が充満。有意義なフォーラムだった。

代表理事に就任して(ご挨拶)

茨城大学人文学部教授 斎藤義則

少しでもこれらの課題の改善に取り組む所存ですので、今後とも皆さまのご支援とご協力をよろしくお願い致します。



情報誌第6号

NPOフォーラム2006

企業社員とNPOの出会い

分科会報告

青年支援/トヨタカローラ新茨城で職場体験

コンテンツ

- 1 表紙 NPOフォーラム2006 高橋陽子さん
- 2~3 NPOフォーラム 基調講演、コラム
- 4 分科会A
- 5 分科会B
- 6~7 分科会C
- 7 青年支援
- 8 コモンズからのお知らせ



茨城でNPOにとり組む人と、応援する人を増やす...それがコモンズの使命です。

第6号

発行日 2007年3月28日

発行者 茨城NPOセンター・コモンズ

行政依存型社会から 市民自立型社会へ

今、社会貢献が求められるのは市民一人ひとり。
企業人、NPO、地域住民として自分たちの社会
を自分たちの力で変えていく。フィランソロピーの
理念で地域づくり、人づくりを提案。

偽善も積もれば慈善になる

高橋さんは、1991年までスクールカウンセラーを務め様々な相談業務にあたってきた。子どもの問題を問う時、母親が責められる社会。そして、母親も自分自身を責める。これは、構造的な問題で、お父さんが働く企業社会の影響が濃いと、考えるようになった。このままでは、子どもは救われない。そして、大人がしょぼくれているは説得力がないと考えるようになった。

そこで、日本フィランソロピー協会を立ち上げた。フィランソロピーとはギリシャ語の人類愛を意味し、社会貢献活動の普及を行っている。人類愛というと偽善だと感じる人もいるけれど、偽善も積もれば慈善になると考え、思いを貫き現在にいたっている。

現代社会に求められる社会参加

戦後の企業は社会や家庭の繁栄を目指して来たが、徐々に社会や環境の変化による摩擦が生じ、企業の社会的責任が問われるようになった。

一方、行政は各省庁がたて割り制度をつくり業界をリードしてきた。それ故に現在の日本があるのだが、「蛸壺社会」と呼ばれる日本の社会は一步外へ出ないと周りが見えないという特徴がある。

結果、今日の社会問題として環境の保全、地域社会の再生、次世代の子どもたちの健全育成という課題がある。そこで、企業でも行政でもない市民の立場での社会貢献活動、つまりフィランソロピーの取り組みが重要になる。

(次項へ)



高橋陽子さん

社団法人
日本フィランソロピー協会
「一人ひとりの善意や社会責任をカタチにする行動を支援し、心温かく自由闊達な社会づくりを目指します」
・企業の社会貢献活動・CSRの推進を支援
・社員と個人の社会参加活動のきっかけづくりを支援
・行政・企業・NPOの橋渡しと連携

【連絡先】
〒100-0004
東京都千代田区大手町2-2-1
新大手町ビル244区
電話：03-5205-7580(代)
FAX:03-5205-7585(代)
http://www.philanthropy.jp

斎藤コーディネーターのまとめ
体験事業だけでは採算がとれない。NPOの経営にしても企業の社会貢献にしても持続することが重要。人は自分がほしいと思えばお金を出す。お金を払ってもいいと思わせる企画力重要。これをどう高めていけるか。県内でもツーリズム関係で同じような活動をしている団体は多いが、それぞれの

強みをコーディネートする機能が弱い。京都の深山町は有名な観光地だが、民宿が3件しかなく民宿以外は観光客は迷惑だと考えていた。そこで、集落で会社組織をつくり産直で物販を行い、配当を分配するようにしたら町のみなが喜んだ。このような、地域資源をつなぎ成果を地域に還元するような仕掛けが重要だ。

NPO側は、人件費などを得るためにどう収益を得るかを考えることが必要。会社は、利益をどう社会に役立てるかを株主にも伝えていく。自分の社業にフィットした社会貢献を考える必要がある。企業とNPOとの接点をどうつくるか。今回の発表者のような企業と市民団体をつなぐ役割のキーマンが重要だ。

トヨタカローラ新茨城の

新しい社会貢献



職場体験風景

コミュニティーレストラン「とらい」の青年たちが、昨年7月からトヨタカローラ新茨城で職場体験および研修を始めた。これは同社が「とらい」スペース事業に理解を示し、社会貢献の一貫として全面的な支援を提供してくれたものである。深刻化しているひきこもり対策に一石を投じた、画期的な試みの一部を紹介する。

ゆるやかな回復

ひきこもりがちの若者が、就労に向けて研修する場として水戸市内にコミュニティーレストラン「とらい」を開設して、早4年の歳月が流れた。現在10人の青年が「とらい」に通っている。その青年たちの共通点は、人との距離のとり方やストレスに対応する仕方があまり得意でないため、社会に出られず家庭にひきこもってしまったことがある青年たちだ。その壁を乗り越え、「とらい」という場にめぐりあい、スタッフの温かいサポート、レストランの調理や接客作業の中からコミュニケーションが生まれ、和やかな雰囲気のある場所となっている。

職場体験の場所を提供

しかし、「とらい」は就労の場ではない。対人関係に少し自信を持った青年のため次のステージが必要である。そのため県内の企業に職場体験や就労に向けた支援の可能性をお願いしてきた。

そんな時、職場体験の場所提供に名乗りを上げてくれたのがトヨタカローラ新茨城だっ

た。同社は、改善グループの課長と若い女性の方を青年支援の担当者として配置し、各店舗からたのまれた印刷物の作成やサービスツールメンテナンスなどの職場体験メニューを用意してくれた。体験は昨年7月から開始、週2回1回2~3名が参加している。最初青年たちは、緊張のあまり顔面蒼白、蚊の鳴くような声での受け答えしかできなかった。また、体験を始めたばかりの頃、体験当日急に体調が悪くなり全員が欠席するなど、担当者の方に迷惑をかけたこともあった。

自信と理解

しかし、半年が過ぎ青年も職場に慣れ、同じフロアの人とコミュニケーションが図れるようになってからは、職場体験へ行くのが楽しみになってきているようだ。青年の中には、作業の改善を提案するなどして、同社でアルバイト雇用の可能性が出てきた者もいる。

このような体験ができる企業が増えることで、ひきこもりがちだった若者が労働の場を体験し、就労の機会が広がるのが今後の課題である。



大勢の参加者で熱気あふれる会場

NPOと企業の連携事例から学ぶ ~ 共につくる交流・体験事業



コーディネーター 斎藤教授

分科会Cでは、斎藤義則茨城大学教授をコーディネーターに、企業とNPOの連携について2名のゲストの方に、それぞれの事例報告をしていただいた。

また、定住人口が増えない中で交流人口を増やしていくことを問題提起し、高橋さんも交え貴重な意見交換を実施した。



事例報告
南会津グリーンストッククラブ
長原忠義さん



事例報告
京成ホテル 秋元明臣さん

京成ホテル秋元さん
らくらくバリアフリーから
UDスポーツへ

ホテルのバリアフリー化は、2003年から障がいをもった利用者の意見を聞くことから始めた。実際に施設を使ってもらって意見を聞き、同時に障がい者の日常生活を体験し不自由さを知った。利用者の話を聞き、必ずしも完璧な設備を求めていることもわかった。バリアフリー化はトイレ等を除いて大がかりな改修ではなく、衣紋掛けの高さを調整するなど、できることから始めていった。人の意識を変えることを重視している。

研修の際は、良い思い出が記憶に残るよう工夫し、笑顔の記念写真を必ず残している。

投資効果

私たちの取り組みが契機となり、地域や他社でもバリアフリー化が進み、バリアフリーの出前研修も行うようになった。その延長で、霞ヶ浦湖畔のマリーナを拠点にして、アクセスディンギー、カヌー、カヤックなどのUD(ユニバーサルデザイン)スポーツ講座を行っている。「誰でも楽しもう霞ヶ

浦」という観点から、障がい者も高齢者も大人も子どもも参加でき、参加者にも協力してもらうことで、スタッフが増えるという波及効果が生まれている。

ホテル従業員もそこにかかわり、介助の技術や人への接し方を学んでいる。京成がやったのをまねしてみようかという気運が出てきた。

企業の立場から言うと宣伝広告の一部とも考えられる。そして、障がいがあっても楽しめる機会が地域に増えてきている。やってだめならやめたらいいと考えている。

南会津グリーンストック長原さん
貴重な緑の資源を活かす

7年前サラリーマンを早期退職し会津に移住。人口減少が進行し、なんとかならないかと地元の人たちと考え、我が町の財産は自然しかない、グリーンストック「緑

を財産と考える会」が発足した。首都圏に近いという利点を生かし、グリーンツーリズムを行っている。筑波大学教授との出会いもあり若い学生の支援も受けている。

取り組みの目玉はトレイン&バイクである。首都圏から電車で自転車を積んで集客し南会津で自転車を走らせながら楽しんでもらう企画。今年は春・秋3両編成の特別列車を新宿から走らせた。

また、山村大学は自然の中での人材教育として、神奈川県の高校生のキャンプの受け入れなども行っている。地元の人がガイドや教師になり同時に地元の人学ぶことになるきっかけができた。

活動には首都圏の方の参加が多いが、地元の会員がまだ少ないのが現状。鉄道会社と協力して苦勞したのは、電車で自転車を積む難しさ。旅客法の問題やさまざまな壁があった。こういった活動が呼び水になって、ペンション・民宿も交流に一役かってもらい、市民団体も企業も一体となって地域全体の活性化につなげていきたい。そして今後、地域の雇用も生みだしていきたい。(次項へ)

地域活動を始めるには

日本には古くから「お互い様」という言葉がある。社会の中に生活する人間はすべて平等でお互いに助け合うことが必要である。縦社会で考えるのではなく、横の関係を注目してコミュニケーションを図る。職場で、家庭で人間としての共感を大切にすると、自然と周りが見えて来る。この「気づき」が最初のステップである。

例えば、おすそ分けボランティア、趣味ボランティア、特技ボランティアやキャリアボランティア(経理、ものづくり、企画書づくりなど)もできる。

勤労者ボランティアの可能性

日本人の「ボランティア」に対する考え方は「無償・善意」と本来の語義(南北戦争の際の志願兵のように自発的に身を投じる人からきている)とはかけ離れている。このような固定観念から脱却することがまず第1段階である。

企業人はそれぞれの専門分野の(キャリア)を活かすことが出来る。また、企業人は悩みの達人、妥協の達人でもある。成功よりも失敗の経験や仕事の上で積極的に妥協してきた経験が地域では役に立つ。

女性は、善意と善意がぶつかることも少なくないが、男性は冷静に判断できる良い面もある。選択技は沢山ある。

社会参加の醍醐味

企業人は社会参加をすることにより、立場と役割からの解放、チームワークの向上、異文化との出会いなど新たなネットワークづくりが出来る。「他人と過去は変えられないが、自分と未来は変えられる」は真理である。

基調講演 高橋さんの資料より

身近にあるボランティア活動のタネ

- キャリアボランティア
経理、ものづくり
企画書づくりなど
- おすそ分けボランティア
寄附、募金、古本市など
- 趣味のボランティア
園芸、ダンス、朗読など
- 特技ボランティア
運転、パソコン、話し相手など

元気印のNPO

NPO法人 イー・エルダー

IT技術のある定年退職者らが中心になって設立「高齢者たち自身による高齢者問題の解決・支援の連鎖」を目指し、ボランティア団体・NPO・高齢者グループの起業や事業の情報化を支援

会員数	約260名
平均年齢	62歳(昨今はUターン就職の20代が増えた)
事業概要	IT講師の育成・派遣

地域活動を始めるための心得

ヒエラルキーからの解放
縦の関係 横の関係
コミュニケーション力をつけよう
人間としての共感を大切に

コラム 人へ

身も心も健康、それが大切

皆さんは女性の平均寿命が男性より長いのがなぜかわかりますか。先日、アメリカのスタンフォード大学で行われた世界マスターズ水泳選手権では、シンクロ、競泳、飛び込みの3種目に80歳以上の女性たちが参加していました。

私は80歳以上の方が参加されたシンクロ競技を見学しましたが、ゆっくりとしたペースですが、何とも優雅で素敵な演技でした。80歳のソノ口の演技で優勝した選手などは「本当に80代？」と疑いたくなるような容姿端麗なおばさまでした。あんなに美しく健康的に年を重ねられるのは絶対に理想です。一方、驚かされたことは、どんな体型の人でも参加OKというところでした。日本では絶対に目にするここのない巨大な体のおばさまたちもシンクロ競技に出場していました(へ)でもかえってよく浮きそうでした。何か、何でもありのこの自由な雰囲気と、加齢に伴う自然な体型の変化も容認しながら、身も心も健康でいる女性がいっぱい存在するということが最も重要な気がしました。

女性はいろいろなおことにチャレンジし、それを実現しつつあります。社会的にそれが許されるようになったからでしょうし、間違いなく女性の持久力は優れているとも言えます。平均寿命という点で女性が男性を上回る傾向はこのような社会の変化にも大きく影響されていると思います。

NPO法人 ジュース
理事長 小笠原悦子

NPOのスタッフ・メンバ - となり活躍する

コーディネーター



佐藤真智子さん

龍ヶ崎市で活動するNPO法人ユーアンドアイ代表の佐藤真智子さんをコーディネーターに迎え、NPOのスタッフやメンバーとなり活躍する方々にお話をうかがった。

サラリーマンや教職員を退職し、第2の人生をNPOでエンジョイしている皆さんです。

不在ボランティア

ひたちなか市にある「生活支援ネットワークこもれび」のスタッフとして活動する山本芳巳さんは、定年の翌日から活動を開始した。間を空けるとダラけてしまうからと。女房は活動を始めて優しくなったと言うが女房は女房で自由にノビノビ暮らしているようだ(家にいない不在ボランティア)と笑う。

地域の中で

潮来市にある障がい者支援施設「ふれあい潮来」で副理事長を務める田口慶子さんは、33年間の教職員生活を経て早期退職した。

退職後は孫でもみるかなと思っていたが、吉川理事長から誘われ障がい者支援のNPO設立に携わった。最初2人で始まったが後から特養施設で働く仲間と保育士も加わり5人になった。

現在は「デイホームきらきら」

「ふれあい潮来居宅介護事業所」「訪問介護事業所」などを運営しており、お互い学びながら活動を進めている。

常に勉強

つくば市にある「リヴォルブ学校教育研究所」でボランティアとして関わっている龍井昇治さんは、

元私立学校の校長先生。退職後様々な活動を経験しており、ここでの顔もその中のひとつ。

現在、つくば市谷田部の呉服屋の2階を借りて、週4日不登校の小学生をサポートしている。学生たちもボランティアで関わり、彼らも共に学んでいる。

出会いの始まり

牛久市「リーブルの会」西木戸武さんは退職後、牛久市で図書館の運営を行う団体設立の際に、設立スタッフの募集があり応募した。

活動を始めて4年、専属の職員ではないため研修と実践を続けながら多様なスタッフと調和を取りながら活動している。

活動してよかったことはいろんな人との交流や体験ができること。例えば子どもとの交流、紙芝居ボランティアを経験するなど、新しいことに出会えるのでまず始めてみては、とアドバイス。

変えられるのは自分と未来

4人の実践者からの発表を聞いて、きっかけはいろいろだが、さまざまな活動出来るのがNPOの特徴と感じた。

ボランティアの目的は同じでもやり方は様々。目的のために妥協しながら変えていくことも必要。

発表者の皆さん



写真左から西木戸さん龍井さん田口さん山本さん

活動するためのキーワードは「楽しく」であると思うが、「家族の理解」「人に優しくなれる」「最後の皆は夫」「やりがい」「地域のつながり」「なかま」などが大切、コストをかけずにサービスを十分に提供できれば良い。

活動は永続的に楽しく

発表者からは「NPOといえども財源確保は大切」「自分の子ども、親戚に賛助会員として協力してもらっている」「ボランティア活動をとおして外に出る機会があり嬉しいし長生きしたい」「活動は永続的に、障がい者も共に働ける社会になったら良い」など意見が出された。

また、団塊の世代をどのようにして社会に、地域に引っ張りだすか？との会場からの質問に対しては、次の世代を巻き込むためには、今の自分たちが「楽しく」なければ後からついてこない。「収益」と「非収益」とに分けて活動しているのではないかと、など貴重な意見を聞くことができた。

自らNPOやコミュニティビジネスを起業

帯刀治茨城大学教授をコーディネーターに、NPOを自ら立ち上げ(準備中も含む)活躍する皆さんに、立上げのきっかけや活動内容についてお話をうかがった。

会場からも意見などが出され活発な討議を展開した。

近所のがんこ親父

北茨城市のウィラブ北茨城では、高齢者や身体障がい者の方々のためにさまざまなサービスを提供している。訪問介護事業、おでかけサービスや介護保険の枠をオーバーした人に対しても家族同様のサービスを行っている。メンバーは地元の主婦が中心だが、「ありがとう」の言葉に勇気づけられながら丁寧なサービスが口コミで広がり、5年目で、事業収入が3500万円規模にまで成長した。

高松さんは地域の人や子どもたちのため、相談窓口、憩いの場、として機能させたいと語る。昭和初期にはどこにでもいた近所のがんこ親父だったり、おせっかいなおばさんのように、地域のことで目をそむけていられない気持ちを表したとのこと。

楽しく無理せずボランティア

日立市の助川山保全クラブは、自然を学ぶさまざまな活動から命の大切さや環境保全について考えてもらおうとNPOを立ち上げた。きっかけは平成7年に起こった山火事である。火災後、そこは自然公園になったが次第に汚れてきた。それをなんとかしようとゴミ拾いなどのボランティア活動から始めた。

楽しく無理せずボランティア 長い目で森と子どもを育てる 公園の保全と安全に役立ちたい、の3点をモットーに活動を続けたいと多田さんは語る。

出来ることはみんなで助けあい

那珂市にあるたすけあいネット民の会は、発足1年余と新しい法人であるが、立ち上げまでの経験から得た3つのことについて植田さんが語ってくれた。

仲間作りが一番大変であったが、成功したコツは間口を広くしたこと。たとえば年

間の活動費のうち、140万は補助金だが、この情報は活動に参加できない会員さんから得た。直接活動が出来ない人にも協力を求めることも大切。

福祉活動に対しては行政などの期待は非常に強いが、自分たちの生活は自分たちで守り、行政にばかりは頼れないということを人々に訴えながら活動していきたい。

定年退職後は、収入、いきがい、夢を持ちたいと思っている人も多いが、定年後のことは現役時代に考えておくべき。

日本伝統の武道を守る

NPOコネカクラブの飯屋さんは、そもそも企業戦士して地域とはまったく縁のない生活を送ってきた。

34年前、武道を絶やしてはならないという行政の要望もあり、スポーツ活動、柔道を通じて子供たちを守り育てるという活動が始まった。この活動は国際交流でも大いに貢献しているが、日本人が失ってしまった価値観を逆に外国から学ぶこともあるという。

コーディネーターから

会場からの有償ボランティアに関する意見に帯刀教授は、阪神大震災からNPO活動が始まったが、それは長期的・安定的にボランティア活動をするためであり、組織化しなければ長期・安定的な活動は不可能である。地縁・血縁のしっかりしている所ではいいかもしれないが、これらが崩れているところでは必要である。

また教授は、NPO・企業・行政は対等な立場でパートナーとして活動するべきである。行政・企業にできないことをNPOはこれからは行なっていく必要がある、と締めくくった。

コーディネーター
帯刀教授NPO法人
ウィラブ北茨城代表
高松志津夫さんNPO法人
森の自然学校
助川山保全クラブ
多田恒雄さんNPO法人
たすけあいネット民の会
植田貴さんNPOコネカクラブ
飯屋茂さん